

「対等」という語に対する 一般的イメージについての一考察

堀 田 美 保

問 題

アサーティブネス・トレーニングとは、コミュニケーションスキルの向上を目指すトレーニングの1つであるが、人権尊重の思想が土台にあるという点がその特徴である。自分の要求や意見、感情を、相手の権利を侵害することなく、誠実に、率直に表現し、他者と対等な関係を築くためのスキル訓練である。

現在のアサーティブネス・トレーニングの源流は行動療法である。もともとは不安傾向の高いクライアントのためのトレーニングであり、他者とのコミュニケーションを可能にすることを目的として、行動療法家の Wolpe (1969/1992) が開発した療法であった (Alberti & Emmons, 2008)。当初のアサーティブネス・トレーニングでは、主眼はあくまで、クライアントが自信を持って意思表示ができることに置かれており、他者との関係性といった問題はほとんど考慮されることはなかった。

その後、Wolpe (1969/1992) は、トレーニングの過程で、主張できないクライアントが自己主張をしようとするとき一気に攻撃的になってしまうケースがあることに気づいた。彼は、自己表現をアサーティブ (assertive)、非主張的 (non-assertive)、攻撃的 (aggressive) の3つに類型化し、非主張的だけではなく攻撃的な表現スタイルもアサーティブなものに変える必要があると考えた (沢崎・平木, 2005)。

その後、このような療法内でのトレーニングが、現在のアサーティブネス・トレーニングへと変容してきたのは、アメリカ社会におけるムーブメントが影響している。1960年代にその最盛期を迎えた公民権運動、その後の

女性解放運動を背景として、社会的弱者が自らの要求、意見、感情をどのように表明すれば、優勢団体のメンバーに声が届くのか模索される中、利用されたのがアサーティブネス・トレーニング(以後、ATと略す)であった(沢崎・平木, 2005)。人権回復と自己信頼の涵養を目標とした自己主張の方法として役立つことが見出されたのである。1970年にアメリカで出版され、現在に至ってもなお版を重ね、アサーティブネスのバイブルと称されている、アルベルティ(Robert Alberti)とエモンズ(Michael Emmons)による著書“Your Perfect Right(1970/2008)”のタイトルはアサーティブネスの根源を表している。

つまり、現在のATは、単に個々人のコミュニケーションスキルの向上を目指すだけのものではなく、対等な人間関係の構築、さらにはその実現を通しての社会変革を目指すものである。ATが目指すのは、多文化・多価値観の共生、個々人の相互尊重、人権擁護が実現している社会である¹。

アサーティブなコミュニケーションは、「誠実(honesty)」「率直(directness)」「対等(equality)」「自己責任(responsibility)」という4つ柱によって支えられているが、関係性を問題とするATにおいては、中でも特に「対等」の柱が重要となってくる。社会的アイデンティティ理論(Tajfel & Turner, 1986)や自己カテゴリー化理論(Turner, 1987)が描き出しているように、我々は、社会の中でさまざまなカテゴリーに属していると自己あるいは他者から認知され、規定される。たとえば年齢、性別、親子、兄弟姉妹、エスニティ、障がいの有無、職業、役職など、多岐にわたるカテゴリーで自分を位置づけ、何者であるのかを同定しているのである。その認知が生じた瞬間、多くの場合、自分と相手はそのカテゴリー次元における上下関係、権力関係、優劣関係に組み込まれる。このような社会的カテゴリーに起因する各役割には、それなりの権限や責任、自由、義務などが付与されており、そのために二者は「はしご」の「上」と「下」に位置づけられる。そのことが、組織の秩序やなすべき課題のスムーズな進行に貢献する場合も多々ある。し

たがって、社会的カテゴリーから発生する上下関係は必要な場合も多く、それをすべて否定することはできない。アサーティブネスでいう対等性とは、社会的カテゴリーや役割に由来する上下関係を一方で認めつつも、互いに一人の人間として対等な位置に立つことを意味する。そういった立ち位置から、自己と相手に誠実になり、そのときに見えてくる自己の感情、要求・提案を率直に表現し、自分の発言および過去・将来における自分の行動に責任を持つ、ということがアサーティブであるということであり、ATでは、そうするための方法論が展開され、トレーニングで伝えられているのである。

よって、ATにおいて、「対等性」がトレーニング参加者にどのように理解されるかは、トレーニングの成否を決める。トレーニングの現場では、ファシリテーターは「対等」という概念を伝えた後に、参加者が抱えている個々の課題において相手との対等性がどのようにコミュニケーションの中で具体化されるのかを示していくことになる。個々のケースで対等なコミュニケーションを実現するための具体的なフィードバックを行うが、参加者が抱えている「対等」という言葉を巡る観念が影響を与え、ファシリテーターからのフィードバックの理解、受容、さらにはその実践が困難になる場合が多々ある。最悪の場合、Wolpe (1969/1992) が見出したように、非常に攻撃的あるいは操作的なコミュニケーションをアサーティブなコミュニケーションと取り違えてしまうという危険が生じる。

実際に、筆者がATを学校や生涯教育といった現場で行う際に、そのような危険に陥りがちな参加者に会う。特にアサーティブネスの初学者においては、ファシリテーターが十二分に配慮しておかないと、「対等」な関係という概念がATの中で理論化されているものとはかなり異なった形で理解されてしまう可能性は小さくない。参加者における誤解は、アサーティブなコミュニケーションを学ぶ上で大きな障害となる。

そのような事態を回避し、よりよいトレーニングを提供するために、ATのファシリテーターは、「対等」という語にはどのような意味やイメージが

一般的に付与されているのか、どのような用法がされているのか、人々はどのような経験を想起しやすいのかということを知っておく必要がある。その知見によって、ファシリテーターは事前にありがちな誤解をトレーニングの場で適切に指摘する構えを持てることができ、アサーティブネスが目指す対等性とそれらとはどのように異なるのかを具体的に呈示する術を錬ることができる。

ところで、社会心理学は、人間関係や対人コミュニケーションを1つの大きな研究テーマとする学問である。そこで、「対等性」に関する知見を求めてみるのだが、参考となる研究はほとんど見られない、ということに改めて気づかされる。たとえば、隣接する領域、発達心理学においてなら「青年期にある子どもが親と対等になっているかどうか」であるとか(たとえば小高, 1998; 平石, 2007; 池田, 2006)、教育学でなら「教師と生徒が対等であることの是非」であるとか(たとえば、寺崎, 1991)、あるいは、ジェンダー論でなら「男女が対等に働くことの意識」(たとえば、庭野, 2005)といった問題設定を見出すことはできる。ただし、これらの研究においても「対等な関係」とは具体的にどういう関係をさすのか、あるいは当事者たちはどういう関係を「対等」だと認識しているのかといった点について実証的なデータは見あたらない。

社会心理学において「対等」というキーワードを持つ数少ない研究の1つは、太田(2007)によるライバル関係についての研究である。太田(2007)は、高校生や大学生にとって「ライバル」と認知する基準は何なのかを検討する中で、「相互性・互恵性」「競争意識」「対等性・対照性」の3因子を同定した。ここでいう「対等性・対照性」とは比較の対象となりやすい、自分自身と能力や境遇が類似した者という意味で使われている。つまり、太田(2007)では、「対等」はあくまでライバル認知における自己との「類似性」という意味であり、ここでの関心に直結するものとは言えない。

以上のことから、ATにおいて参加者に「対等な関係の構築」という概念

をよりよく理解してもらうための方法を模索していくための基礎データとして、まずは「対等」という語に対して一般に抱かれているイメージやこの語の一般における用法を明らかとすることを目的として調査研究を行った²。本稿ではその報告を行うこととした。

方 法

回答者

大学生の男女、合わせて510名より回答を得た。うち、回答に不備が見られたものについては分析から削除し、500名分の回答を対象とした。うち、女性250名、男性246名であり、性別について無回答者は4名であった。

質問項目

アサーティブネス熟知度：「アサーティブネス・アサーション」について知っているかを尋ねた。「まったく聞いた事がない」「言葉だけは知っている」「中身についても知っている」のうちから1つを選択するよう求めた。

SD法によるイメージ評定：相反する意味を組み合わせた50個の形容語対のそれぞれについて、「対等」という語が持つイメージにあてはまる度合いを6段階（たとえば、「温かい-冷たい」という対であれば、「とても温かい」「少し温かい」「どちらかという温かい」「どちらかという冷たい」「少し冷たい」「とても冷たい」）で評定するように求めた。形容語対リストは、以下の3種類のものから作成された。①30名の大学生に対して行った予備調査において「対等と聞いて思い浮かべる言葉」の自由記述を求めた結果、得られた語、②「対等」という言葉の辞書的定義、類義語を収集したものから選んだ語、③「対等」と共に、アサーティブネスにおける4つの柱に含まれる「誠実」「率直」「責任」という語である。

連想自由記述：「対等」という語を聞いて思い浮かぶ言葉を示すよう求めた。記述数や言葉の長さなどについての制限は設けずに自由に記述するよう求めた。

結 果

アサーティブネス熟知度の確認：この設問への回答者 467 名のうち、「アサーティブネス」「アサーション」という言葉を、「まったく聞いた事がない」者が 80.3%、「言葉だけは知っている」者が 15.8%であった。「中身についても知っている」とした者は 3.9%であった。これらの比率には男女で差異はない ($\chi^2(2) = 2.338$, n.s.)。全体として、アサーティブネスについての知識や AT の経験がない者が大多数を占めるサンプルであった。よって、AT をこれから学ぶ者による回答であり、ここで得られた回答から描き出されるのは、一般的なイメージとみなすことができると考える。

SD 法によるイメージ評定の分析：回答者から得られた評定値に対して、因子分析（主因子法、相関の最大値による初期値の推定、50 回の反復推定）を行った。その結果、固有値が 1 以上である因子が 4 つ見られた。因子 10 までの回転前の固有値、寄与率、累積寄与率について Table 1 にまとめた。スクリープロット (Figure 1) から判断しても、4 因子が妥当であろうと考えられた。その後、バリマックス法とプロマックス法で回転を行い、因子負荷量 .35 以上という基準によって、項目を 4 因子に分類してみたところ、2 つの回転方法による差異が「開いた－閉じた」「同じような－異なった」「責任感の強い－無責任な」「ポジティブな－ネガティブな」の 4 つの項目において見られた。プロマックス法による分類の方が、複数の因子にわたって負荷量が高い項目が少なく、構造をより単純化できることから、こちらの結果に基づき、分析を進めることとした。

回転後の因子負荷量を Table 2 に示す。まず、因子 1 では、「無気力な－

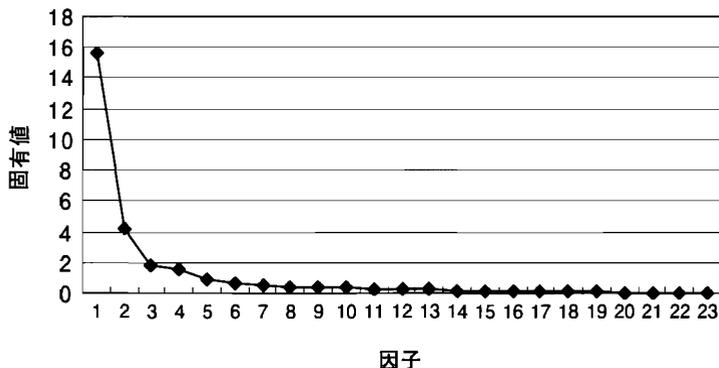


Figure 1 固有値スクリープロット

Table 1 因子分析の結果：回転前の固有値，寄与率，累積寄与率

因子No.	固有値	寄与率	累積寄与率
因子No. 1	15.60132	31.20%	31.20%
因子No. 2	4.265084	8.53%	39.73%
因子No. 3	1.874401	3.75%	43.48%
因子No. 4	1.633165	3.27%	46.75%
因子No. 5	0.961631	1.92%	48.67%
因子No. 6	0.638025	1.28%	49.95%
因子No. 7	0.524780	1.05%	51.00%
因子No. 8	0.450813	0.90%	51.90%
因子No. 9	0.375563	0.75%	52.65%
因子No. 10	0.347537	0.70%	53.34%

元気な」「希望のない—希望のある」「夢のない—夢のある」など、気力に関する形容語対、「遠まわしの—率直な」「曲がった—まっすぐの」といった直接性に関する形容語対、「かっこ悪い—かっこいい」「マイナスの—プラスの」といった良さ—悪さという評価を示す語で因子負荷量が高い。元気に進んでいく良いイメージとして、「積極的前進」因子と命名した。次に、第2因子で負荷が高いものとして、「堅い—柔らかい」「頑固な—柔軟な」「冷たい—温かい」「よそよそしい—親しみのある」など、接する際

Table 2 プロマックス回転後の因子負荷量

形容語対		因子No.1	因子No.2	因子No.3	因子No.4
つまらない	面白い	.712	.207	-.265	.005
鈍い	鋭い	.674	-.374	.026	.050
無気力な	元気な	.672	.168	-.126	.012
保守的な	進歩的な	.648	.045	-.100	.067
希望のない	希望のある	.635	.190	.035	.016
弱々しい	力強い	.610	-.137	.098	.078
遠まわしの	率直な	.587	-.028	.101	.079
遅れた	進んだ	.569	.097	.047	.059
正直でない	正直な	.562	-.016	.093	.040
かっこ悪い	かっこいい	.547	.126	.102	-.043
夢のない	夢のある	.529	.262	.050	-.111
マイナスの	プラスの	.492	.291	.158	.038
貧しい	豊かな	.480	.304	.027	.001
曲がった	まっすぐな	.465	-.234	.371	.097
むなししい	充実した	.459	.297	.170	-.066
閉じた	開いた	.441	.440	.139	-.135
みせかけの	ほんものの	.437	.147	-.024	.341
不自由な	自由な	.425	.294	-.135	.219
無責任な	責任感の強い	.397	-.191	.321	-.062
非効率的な	効率的な	.364	-.040	.143	.317
硬い	柔らかい	-.160	.837	-.084	.041
近寄りたがいない	親しみやすい	.074	.744	-.065	.079
頑固な	柔軟な	.106	.673	-.107	.119
せかせかした	ゆったりした	-.192	.673	.068	.068
厳しい	甘い	-.495	.661	-.159	.062
よそよそしい	親しみのある	.297	.658	-.096	-.068
冷たい	温かい	.022	.656	.137	-.090
こせこせした	おおらかな	.166	.653	-.005	.042
距離のある	距離のない	.094	.639	.044	.052
仲の悪い	仲のいい	.133	.606	.125	.087
暗い	明るい	.364	.591	.064	-.171
攻撃的な	攻撃的でない	-.433	.521	.432	.060
陰気な	陽気な	.157	.518	.076	-.196
心地の悪い	心地よい	.311	.490	.046	.097
意地悪な	やさしい	.031	.477	.218	.106
いい加減な	誠実な	.333	-.008	.605	-.100
間違った	正しい	.353	.054	.497	-.126
公正でない	公正な	.333	.038	.496	.038
濁った	透き通った	.199	.130	.492	-.009
調和のない	調和のとれた	-.026	.366	.430	.154
むらのある	むらがない	.065	-.030	.479	.201
異なった	同じような	-.204	.239	.415	.041
不透明な	透明な	.371	.076	.409	.093
垂直の	水平の	.061	.042	.392	-.031
非現実的な	現実的な	.277	-.067	.061	.699
不可能な	可能な	.222	.019	.085	.674
実現できない	実現できる	.258	.021	.050	.623
難しい	簡単な	-.206	.173	.021	.493
ネガティブな	ポジティブな	.327	.313	.188	-.120
うるさい	静かな	-.159	-.054	.346	.250

のあたりのよさや距離の近さに関する形容語対が並んでおり、「柔和・親和性」因子とした。第3因子には、「いい加減な—誠実な」「間違っ—正しい」に加え、「調和のない—調和のとれた」「濁った—透き通った」などでも因子負荷量が高く、バランスがとれた、クリーンで公平な正しさを示す形容語対が並んでいる。この因子を、「公明性」因子とした。最後の第4因子は、「非現実的な—現実的な」「不可能な—可能な」といった形容語対で値が高く、「現実性」因子とした。因子相関係数行列(Table 3)を見ると、これらの因子のうち、因子1と因子3、つまり「積極的前進」因子と「公明性」因子では中程度の相関が認められる。

Table 3 プロマックス回転後の因子間の相関係数

	「積極的前進」 因子	「柔和・親和性」 因子	「公明性」 因子	「現実性」 因子
「積極的前進」因子	1.0000			
「柔和・親和性」因子	.3867	1.0000		
「公明性」因子	.4720	.2415	1.0000	
「現実性」因子	.2915	.2046	.1492	1.0000

少数ではあるが「アサーティブネス」の内容を知っていると回答した者が含まれていたため、熟知度によってイメージが異なるか、分析を加えた。「アサーティブネス」という言葉だけを知っているだけでイメージが異なるかは考えにくいので、「中身を知っている」場合に、他の回答者と異なるイメージを抱いているかを見ることとした。両群のサンプル数は大きく異なるため Kruskal-Wallis 検定によって、4つの因子から計算される因子得点を比較したが、いずれの因子についても差異は見られなかった(因子1から4について順に、 $\chi^2(1) = 2.616, 0.134, 3.001, 0.000$, すべて n.s.)。

次に、男女別に因子得点の平均値を見たところ、「公明性」因子において差異が認められた。女性は .136 と正の値であるのに対して、男性は -.133 と負の値となっている ($t(425) = 2.889, p < .01$)。つまり、「対等」という語

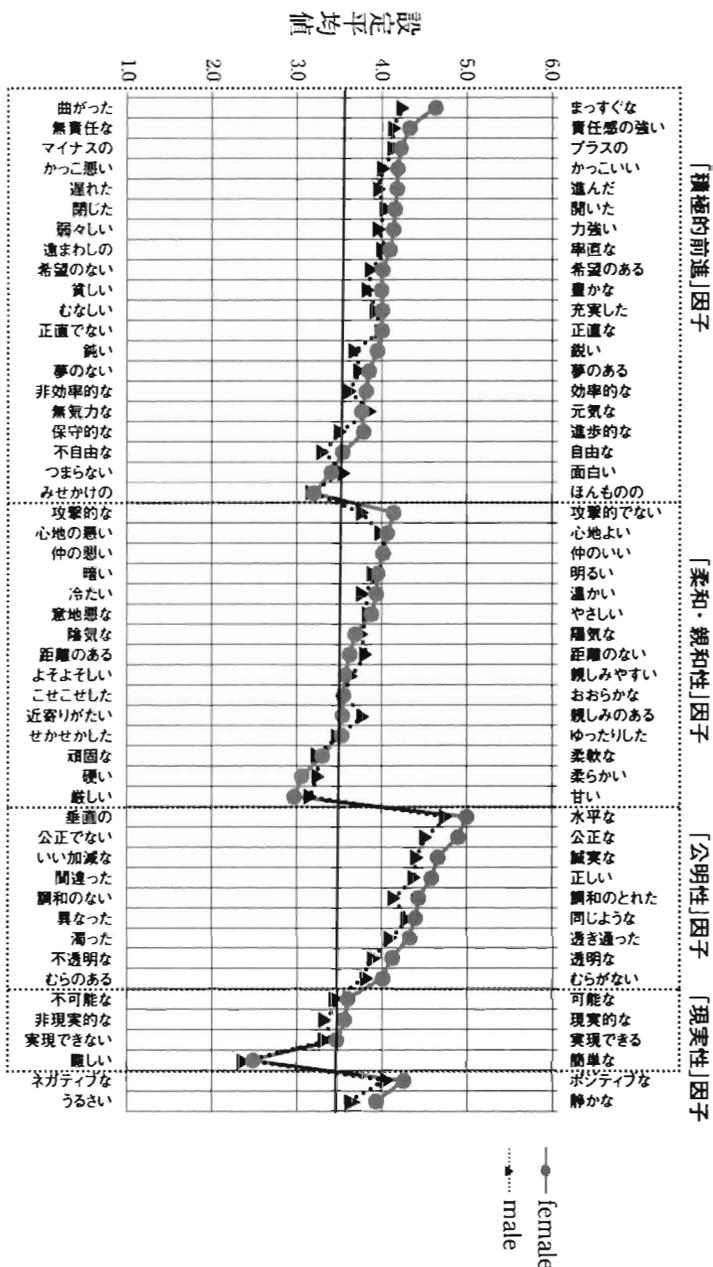


Figure 2 イメージ評定の平均値

から、男性に比べて、女性はよりバランスのとれた正しさを感じ、より公明なイメージを持っていたと言える。その他の因子については、男女間で差異はみられなかった。

Table 4 イメージ評定における男女差

形容語対		平均値		t 値
		female (n=250)	male (n=246)	
まっすぐな	曲がった	4.6	4.3	3.227 **
進んだ	遅れた	4.2	3.9	2.443 *
鋭い	鈍い	4.0	3.7	2.274 *
進歩的な	保守的な	3.8	3.5	1.967 *
攻撃的でない	攻撃的な	4.2	3.8	2.814 **
親しみのある	近寄りがない	3.5	3.8	2.120 *
公正な	公正でない	4.9	4.5	2.925 **
調和のとれた	調和のない	4.4	4.2	2.011 *
静かな	うるさい	3.9	3.7	2.524 *

** : $p < .01$, * : $p < .05$

形容語対それぞれについての評定平均値を男女別にまとめた (Figure 2)。全体的には、特に「公明性」因子に関わる項目では評定が高く、「対等」という語からは「公正」で「誠実」、また「調和のとれた」「水平」というイメージが高い。先に見たように、有意な性差をみると、この因子に関わるものでは、女性の評定値がよりポジティブである (Table 4 参照)。「積極的前進」因子では、やはり女性においてより評定値が高いものが含まれており、より「まっすぐ」で「進歩的」というイメージがある。「柔和・親和性」因子では、どちらかという「攻撃性が低く」「心地よく」「仲のいい」イメージがあるが、それほど強くはない。ただ、女性では攻撃性がより低いとされている。「親しみのある」という形容語対では、唯一、男性がより評定が高いという結果となった。しかしその一方で、どちらかという「頑固な」「固い」「厳しい」というイメージも見られた。最後に、「現実性」因子では、

男女ともに評定値は低く、特に「簡単な—難しい」の対では平均値がかなり低く、対等であることは難しいと感じられているようである。

以上をまとめると、「対等」という言葉についてのイメージには、「積極的前進」「柔和・温和性」「公明性」「現実性」といった4つの因子構造が見られ、「対等」という言葉から、女性はよりバランスのとれた正しさや進歩性、攻撃性の低さを感じているのに対して、男性はより親しみやすさを感じていた。また、男女ともに、「対等」とは現実性が低く、難しいものというイメージが強いようであった。

連想自由記述の分析：記述をした回答者は、分析対象者500名中453名(90.6%で、うち女性229名、男性221名、性別不明3名)であり、多くの回答者から多岐にわたる記述を得た。記述された語の総数は1388個、1人平均3.1個、最多は13個である。男女で記述者数および記述語数には統計的な有意差は認められなかった($t(494)=0.160$, n.s.)。記述された語の中で、かな・漢字という点においてのみ異なる語は漢字に統一した(たとえば、「さべつ」は「差別」に修正)。結果、全体では、544種類の語が記述された。これらをいくつかの観点から分析してみた。なお、記述の分類は筆者が1ヶ月のインターバルを置き3度行い、一致したものを採用した。以下に、今回の調査結果および理論的関心から着目して行った分析結果のうちのいくつかを報告することとする。

まず、「対等」という概念が使用されたり、関わってくる場面や状況、人、関係についての記述と思われるものを選び出した上で分類し、それぞれにおける記述者数をまとめた。結果をTable 5に示す。「家族」「友人」「教育」「スポーツ・勉強」など、回答者にとって比較的身近な場面から、「ビジネス」「外交・政治」などの公的場面に至る。身近な場面では、性別や年齢、エスニシティ、障がい、社会経済的地位など属性に関わるものと、友人・仲間や家族など関係に関わるもの、教師や審判など役割に関するものが含まれ

Table 5 状況・場面に関する連想語の分類

カテゴリー	連想語	記述者数				比率 記述数 398中%
		female (n=229)	male (n=221)	n.a. (n=3)	total (n=453)	
人間関係	(人間関係 対人関係)	8	10	0	18	4.5
人類	(人類 人間 すべての人 みんな)	4	5	0	9	2.3
二者関係	(1対1 二者関係 相対)	1	5	0	6	1.5
上下	(上下 上下関係 上から下 下から 上下のない)	6	5	0	11	2.8
友人・仲間	(友人 友達 友人関係 友達関係 幼馴染 親友 友情 女友達 仲間 仲良し 仲が良い タメ口 パートナー 相棒 同志 大学生)	33	47	0	80	20.1
家族	(家族 親子 父 兄弟 姉妹 双子)	9	9	0	18	4.5
性別	(性別 同性 男女 ジェンダー ジェンダーフリー 女性解放運動 男女差別 男女不平等 男女平等 男女の違い 男女差 仕事での男女関係 仕事上の男女 夫婦 夫婦別姓 両親 恋愛 恋人 カップル 結婚)	60	14	0	74	18.6
年齢	(年齢 年 年齢差 同年齢 おない年 学年 同期 同僚 同級 同年代 同世代 子どもと大人 大人 子ども 大人から 子ども 年上)	13	14	0	27	6.8
障がい	(障害者 障害 障害者差別 バリアフリー)	2	2	0	4	1.0
エスニシティ	(人種 宗教 種族)	0	3	0	3	0.8
社会・経済的地位	(地位 社会的地位 階級 身分 社会 関係 同じ地位 同地位 同等の地位 肩書きのない 格差 格差のない貧富 貧富の差)	12	9	0	21	5.3
スポーツ・勉強	(スポーツ クラブ活動 サッカー 高 校野球 試合 審判 選手 好敵手 ライバル 接戦 身体能力 勉強 試験 受験 学力 同じ能力 偏差値)	13	27	1	41	10.3
教育	(教育 教師と生徒 生徒・教師の表面 先生 えこひいき ひいき ひいきし ない ひいきなし いじめ)	9	3	0	12	3.0
外交・政治	(外交 外交関係 国 国家 国家間 国家関係 国際関係 国際的立場 政治 政府 貿易 条約 日韓 日米関係 アメリカ)	11	17	0	28	7.0
交渉・問題解決	(交渉 対話 討論 話し合い 発言 意見 じゃんけん 口論 けんか 意見の 尊重 言い合い)	13	11	0	24	6.0
ビジネス	(ビジネス 仕事 取引 上司・部下 給料 収入 雇用 就職 経済 経済的 地位)	9	4	0	13	3.3
法律	(法律, 裁判, 罪, 最高裁)	1	4	0	5	1.3
その他	(音楽 酒の場 秀吉と家康)	0	4	0	4	1.0
合計		204	193	1	398	100.0

ている。幅広い関係性を連想させる語であることがわかる。

ただし、中でも最も記述が多かったのは「友人・仲間」に関する記述である。すでに親しい関係では対等であるという連想かと推測できる。特に、男性により記述が多かった（男性で24.4%、女性で16.2%、 $z=2.030$, $p<.05$ ）。また、男性でより多くみられたのは「スポーツ・勉強」に関わる語であった（男性で14.0%、女性で6.4%、 $z=2.520$, $p<.05$ ）。これに関連して、「競争」に関わる連想語を調べてみたところ（Table 6）、男性で「争い・勝負」「力」「ライバル」「対立」がより多く、43.0%が「競争」に関する語を記述しているのに対して、女性ではその半分程度の22.7%であった（ $z=4.586$, $p<.001$ ）。これに対して、再びTable 5を見ると、女性では「性別」に関わる連想語が「友人・仲間」と同程度に多かったが、男性ではそれほどでもなく（7.3%）、男女の対等性という連想は女性において（29.4%）より多かった（ $z=5.666$, $p<.001$ ）。

以上のことから、描き出されることは、「対等」という語から、男性は勉

Table 6 「競争」に関する連想語

カテゴリー	連想語	female (n=229)	male (n=221)	total (n=450)	比率*
争い・勝負	(競う, 戦う, 闘う, 競争, 接戦, 戦い, 戦争, 戦力, 相打ち, 渡り合う, 正々堂々, 五分五分, 互角, 勝負, 負け犬)	15	25	40	27.2
力	(パワー, 圧迫, 権力, 力, 力関係)	6	17	23	15.6
ライバル	(ライバル)	6	16	22	15.0
能力	(実力主義, 実力, 能力, 力量, 学力, 試験, 受験, 就職, 評価, 偏差値, 勉強)	11	11	22	15.0
対立	(対立, 対抗, 敵対, 敵, けんか, 言い合い, 口論)	8	11	19	12.9
スポーツ	(スポーツ, 高校野球, 選手, 試合, サッカー)	3	12	15	10.2
攻撃	(攻撃的, 高圧, 抑圧, 乱暴, いじめ, ナイフ)	3	3	6	4.1
総計比率	(対記述者数)	22.7%	43.0%	32.7%	

* 註:「競争」に関する連想語総数(147)に占める割合。

強やスポーツなどにおける身近な友人関係(おそらく同性)を連想するのに
対して、女性は同性の友人だけではなく異性との関係性についても連想をす
る傾向にあるということが言える。

次に「公正性」や「バランス」に関してであるが、先に見たように、イ
メージ評定において男女差が見られた。連想語についても同様の傾向がうか
がえる。Table 7に見られるように、全体では6割強の回答者が「公明」に
関わる語を記述していたが、特に、女性は「つりあい」「均等」などバラン
スがとれた偏りのなさといった語を示す者が男性より多かった(女性で
17.2%、男性で12.2%、 $z=1.684$, $p<.05$)。これに対して、数としては少ないが、男性では「フェア」「公正」といった語を示す者(5.0%)が女性
(1.7%)よりも多かった($z=1.909$, $p<.05$)。

Table 7 「公明性」に関する連想語

カテゴリー	連想語	female (n=229)	male (n=221)	total (n=450)
公明	平等 (平等)	86	73	159
	公平 (公平)	18	15	33
	公正 (公正, フェア)	4	11	15
不偏	(均衡, シーズー, つりあい, 天秤, 等 しい, バランス, 水平, 機会均等, 均 等, 均一, 差をつけない, まんべん ない, ひいきしない, ひいきなし, 同じ扱 い等)	41	27	68
	透明 (正々堂々, 正直, 誠実, 開放, 隠し事 がない等)	6	9	15
小計比率	(対記述者数)	67.7%	61.1%	64.4%
不公明	差別 (差別)	16	9	25
	偏向 (不公平, 不平等, ひいき, 一方的, 偏 見等)	5	14	19
	不透明 (にごった, 不透明な)	2	0	2
小計比率	(対記述者数)	10.0%	10.4%	10.2%

「公明性」に関わる語の中で多かったのは「平等」という語(159語)であ
るが、連想語総数の11.5%にあたり、全連想語の中で最多であった。ただし、
記述者の35.3%であり、最多であるとは言え、約3分の1の回答者しか列挙

していないともいえる。英語では、「対等」と「平等」という語はいずれも「equality」で表現されるものであるが、これらの数字を見ると、日本語においてはこれら2つの語のニュアンスが多少異なることも考えられる。これについては後で考察を加えたい。

また、「同じ」という形容詞が数多く見られた。Table 8に見られるように、全体で7割の者が「同じ」に関わる語を挙げており、逆に「異なる」という語に関わる記述をした者は男女とも1割程度である。特に、女性よりも男性で多い($z=3.054$, $p<.01$)。先に見たように、関係として近い、同じ年齢、能力といった語が多く、身近な友人関係で力が拮抗している関係といった連想が男性により多いためと考えられる。

Table 8 「同じ・異なる」に関する連想語

カテゴリー	連想語	female (n=229)	male (n=221)	total (n=450)
同じ	同じ (同じ, 同等, 同じ扱い, 同じ考え, 同じ視点, 同じ立場, 同じレベル, 同質, 同世代, 均衡, 均等, 一緒, 同等の地位, 差をつけない, 機会均等, ハンディなし, 互角, even, 差がない等)	106	104	210
	横関係 (友達, 友人, 親友, 相棒, 同志, パートナー, 仲間, 仲良し, 同期, 幼馴染, タメ口, 友情, 友好等)	33	58	91
	近い (距離がない, 隣, 隔たりがない, 気兼ねのない, 遠慮がない, 壁がない等)	7	7	14
小計比率	(対記述者数)	63.8%	76.5%	70.0%
異なる	異なる (年齢差, ギャップ, ハンディ, 格差, 貧富, 貧富の差等)	7	5	12
	上下関係 (上下関係, 上司・部下, 親子, 親子, 子どもと大人, 教師と生徒, 兄弟, 姉妹等)	15	11	26
	遠い (距離感, 距離のある, 気兼ね, よそよそしい)	3	2	5
小計比率	(対記述者数)	10.9%	8.1%	9.6%

最後に、先の因子分析で抽出した「現実性」について連想語を分析してみると (Table 9を参照)、18%程度の回答者が関連する語をあげていた。性差は有意ではない ($z=1.409$, n.s.)。その中では「うわべだけ」「みせかけ」

「嘘っぽい」など「表面的」と分類できるような語が半数近くを占めていた。それに対して、実現されているというような語はほとんど見られなかった。また、「理想」や「実現困難」と分類できる語が記述されており、これらからみる対等性のイメージは、「理想ではあるが、真の『対等』などは実際には存在せず、存在しているようでもそれはうわべに過ぎず、実現は困難である」という悲観的なイメージが持たれていることが窺える。

Table 9 「現実性」に関する連想語

カテゴリ	連想語	female (n=229)	male (n=221)	total (n=450)	比率*
理想	(理想, あるべき姿, 夢, そうありたい, 希望)	9	13	22	27.5
実現困難	(困難, 実現困難, 難しい, 実現不可能, 不可能, 無理, 非現実的)	10	11	21	26.3
表面的	(表面的, 表向き, うわべ, みせかけ, 口だけ, 口先, 嘘, 嘘っぽい, 嘘臭い, 建前, 裏, 偽善, 妄想, 義務的, 本当でない, 非現実的, ありえない, 存在しない)	15	20	35	43.8
実現	(当たり前, 簡単)	1	1	2	2.5
総計比率	(対記述者数)	15.3%	20.4%	17.8%	

* 注: 「現実性」に関する連想語総数 (80) に占める割合。

考 察

本調査の結果を簡単にまとめる。まず、「対等」という語のイメージには「積極的前進」「柔和・親和性」「公明性」「現実性」といった構造が見られた。「対等」という言葉から、女性はよりバランスのとれた正しさや進歩性、攻撃性の低さを感じているのに対して、男性はより親しみやすさを感じていた。また、男性は勉強やスポーツなどにおける身近な友人関係(おそらく同性)あるいは「争い・勝負」といった連想をするのに対して、女性は同性の友人だけではなく異性との関係性についても連想が及び、「バランス」や「つりあい」あるいは「協調」といった語を連想する傾向がより高かった。また、男女ともに、「対等」とは現実性が低く、難しいものというイメージ

が強いようであった。

これらの結果から、AT の実践にとっていくつか留意すべき点が挙げられる。「積極的前進」「柔和・親和性」「公明性」の因子で全体的によりポジティブなイメージがもたれていることは、参加者が「対等な関係の構築」というトレーニングの目標を受容しやすいと考えられ、AT を行っていく上で好ましいことである。しかし、「現実性」因子について非常に悲観的なイメージを持っているという傾向は、AT にとっては厳しい結果となった。特に「表面的である」というイメージは、アサーティブネスにおける「誠実」という柱に反するものであり、2つの柱が矛盾するものとして捉えられてしまう危険性もでてくる。対等な関係の構築は確かに容易ではないが、しかし可能であることを参加者にいかにして実感してもらえるのか、悲観的な姿勢に希望を与えるにはどのようなプログラム運営が必要なかが検討されねばならない。対等な関係を構築するようなコミュニケーションとはどのようなものであるのかを具体的に簡潔に示しつつ、実現可能であることを参加者が体験できる必要性が改めて浮き彫りになったといえる。

AT において留意すべき第2点としては、「対等」については一般的に「同じ」というイメージが強いという点である。太田(2007)の言うライバル関係認知における「対等性」も類似した他者ということで、同じ部類に入る。もちろん、AT においても「同じ目線」などは頻繁に使用される表現であり、「同じ」という形容詞がつく語すべてに言えるわけではないが、「同じ地位」「同じ年齢」「互角」といった同じ属性や能力といった連想語は、アサーティブネスとは対極にある。むしろ、上司と部下、義理の親子など、地位や年齢が異なっていたり、医者と患者など知識や能力が異なっていたりするときに、いかに対等となるのがアサーティブネスの焦点である。「横関係」や「近い」と分類される連想語についても同様のことが言える。友達関係や遠慮のない関係ではなく、むしろ距離や上下があることで言い出しにくい関係の中でいかに対等になるのがアサーティブネスの目標である。それ

は、関係の「下から上」だけではなく「上から下」への場合もある。アサーティブネスはむしろ「同じではない関係」、つまりは、上下関係や価値観の異なる者同士において力を発揮するものであることを強調することが必要である。

上述の実現不可能というイメージも、こういったことに関連している可能性がある。「異なる関係」において有用な道具であることの理解が参加者の中で不十分であると、役割上や能力上で格差があるものは仕方がない、という諦めから悲観的なイメージが生まれてしまう、あるいは、そのイメージを払しょくできないままとなる可能性が高いのではないだろうか。ただ、本結果では男性は身近な友人関係を連想することがより多かったが、そのような場合においても実現困難というイメージを持っているのかという点には疑問が残る。あるいは、女性は友人とともに、男女の対等性を連想することがより多かったが、それについてやはり困難さを感じているのだろうか。逆に、男性が男女の対等性をあまり連想しないのは、日常的に意識することが少ないためであろうか。今回、データ構造上これらの点について分析を行うことができなかったが、今後、どのような場合に、またどのような理由から対等性の実現が困難で不可能であると感じているのか、詳細に検討することが必要であろう。

第3点は「競争」という連想についてである。本結果では、特に、男性で身近な関係での競争という連想がより多かった。これも、上述した「同じくらいの力」で競り合う、という発想からくるものと推測される。これはまさに、Wolpe(1969/1992)の懸念した点である。要求や提案の表現自体やボディランゲージは温厚で一見攻撃的にはみえない場合でも、「自分が正しい」「相手に要求をのまそう」という意図が先行してしまうと攻撃的なコミュニケーションとなる。交渉を「勝ち負け」というスタンスで捉えることにならないよう参加者の言動に対して適切にフィードバックすることがファシリテーターには必要である。

以上、本結果から示唆される AT 実践における留意点を述べてきたが、最後に、社会心理学における「対等性」研究の位置づけあるいは今後の方向性について考察を加えておく。

先述したように、AT における「対等性」というのは英語の equality の訳語である。この英語に当てられる別の訳語に「平等」があり、本結果においても連想語としては最多であった。しかし、それは回答者の約 3 分の 1 にとどまった。「対等」と異なり「平等」という概念については、社会心理学の中でも、分配の衡平 (equity) という文脈で検討されてきた (たとえば原田, 2006; Hotta, 1992a, 1992b; 田中, 1996)。ただし、福野 (2009) が指摘するように、「衡平」に関する研究の多くは、第 3 者が他の 2 人 (あるいはそれ以上) の者に対して行う分配を扱ったものが多い。たとえば、連想語の中にもみられた「ひいき」という語はそのような状況で使われる語である。「ひいき」で問題にされるのは、(通常はより何らかの権限を持つより上位の) 分配者が、自己と他の誰かに分配をする状況を指すのであり、ここでは平等—不平等が問題となる。このような状況では、たとえば不平等な分配をした分配者に自己がどう向き合うのかを問題としたときに、「対等」という概念が当てはまる。決して、誰かに「平等に向きあう」という言い方はしない。前者が分配されるより受動的な状態にあるのに対して、後者はより能動的な行為者として自己の在り方を指しているといえるだろう。その点こそが、アサーティブネスが問題とする主体的な生き方といえる。類似しているとはいえ、「平等」とコミュニケーションの当事者が互いに対してどう向き合うかという問題である「対等」とはまた異なる関係性での概念だと言えよう。「平等」については、すでに社会心理学的研究が蓄積されており、それらの知見が「対等性」についての人々の理解の検討にとって含んでいる有用性を見極めつつ、さらに人々が一般にどのようなやりとりがあれば「対等な関係」を構築できたと感じるのか、それとアサーティブネスが指し示す方向とはどこが異なるのか、今後検討されるべきテーマである。

第2に、社会心理学で研究されている「衡平理論」は、投入と結果の等比率を公正原理としており、基本的には分配された結果を問題にしている。この点も「対等な関係の構築」という文脈とは相容れない。相互作用（分配や交渉）の結果のみを問題としてしまうと「対等」という関係は成立しにくい。言い出せなかった要求や提案を相手に伝えてみるのは、それを受け入れて欲しいからである。しかし、先述のように、そこで「相手に要求を受け入れさせよう」「相手が受け入れるべき」というスタンスに立ってコミュニケーションをとれば、攻撃的となり、そう思えば思うほど、逆説的に要求は通らない。したがって要求が通るか否かという結果そのものに着目する限り「対等な関係性」は存在し難い。おそらく、アサーティブネスにおける「対等性」の問題は、「衡平」よりは、むしろ手続き的公正 (procedural justice)、つまり分配方法におけるフェアネスという概念により近いのかもしれない。Thibaut and Walker (1975) が争議解決という文脈において、手続き的公正が当事者の公平感にとって重要であることを指摘して以来、最終的に満足な結果が得られなかったとしても、被分配者において結果の受容やシステムへの評価を高めることが見出されてきた (Lind & Taylor, 1988)。手続きの一貫性、決定の変更・修正可能性など、手続き的公正の要因が特定される中 (Leventhal, 1980)、Tyler, Rasinski, & Spodick (1985) は、意見・声 (voice) を表明する機会が最も手続き的公正感に重要であるとした。2者間でのコミュニケーションという文脈では、この声を発する機会とは、双方が互いに認め合うことであり、双方が聴く態度を示すということになる。手続き的公正に関する研究において分配者に対する評価や公正感について見出されてきた点が、コミュニケーションの当事者同士の対等感にも適用できるものなのか、検討する価値はあるだろう。

第3に、社会心理学の大きなテーマでもあるカテゴリーによるステレオタイプの認識をどのように改変していくのか、という点にも、関係における「対等性」の問題は大きく関与していると考えられる。日常の中で当事者が

それぞれ担っている役割、カテゴリーに基づく関係が対等ではない中で（たとえば、上司と部下、年上と年下、親子と子、教師と生徒、障がい者と健常者など）、そのカテゴリーや役割を担いつつ、ステレオタイプの相互理解を超えるための方法の模索にとって、「対等性」の研究は意義ある情報となると考える。

最後に、研究の対象者という点から今後の研究について述べておく。今回報告した調査の回答者は大学生であった。現在、日本において、ATは、企業人、医療従事者、福祉・保健・援助職、自治体職員、教育関係者といった人々への研修、あるいは女性や障がい者を対象とした市民講座として数多く実施されている。また、近年、子どもたちの対人関係調整能力の低下が懸念される中、小学校や中学校といった教育現場でもアサーティブネスが注目を集めてきている。これに対して、大学生の参加者は一般のAT講座においても比較的少なく、大学でのATの実践もようやく始まったところといえる³。したがって、大学生は、ATの受講者としてはまだ少数派であり、今後、一般の社会人あるいは小学生・中学生についてのデータが必要となってくる。

また、本結果では、「中身について知っている」とした回答者もいたが、それ以外の回答者と「対等性」イメージに差異はみられなかった。「知っている」という回答ではあったが、その程度や内容、またはトレーニング経験などまでは不明である。トレーニングを積むほどに「対等性」の理解に変化がもたらされることが期待されるが、果たしてそれはどのようなプロセスを経るのだろうか。これまでいわゆるATの効果研究としては、自己信頼感の向上（たとえば、清水他，2005）やストレス低減（たとえば、嶋，2000）などの観点から検討が加えられてきているが、「対等な関係性」の理解という観点からもトレーニング参加者における変容プロセスを追うことも重要であろう。

註

- 1 「アサーティブネス」以外に「アサーション(assertion)」という語が用いられることがある。日本では、どちらかと言えば後者が多いように思える。両者はともに“assert”から派生した語だが、菅沼(2002)は、後者が「限りなく離れているものが近づく運動、といった意味の名詞(p. 9)」であるのに対して、前者は「その世界を意味」し、「自他がともに大事にされた、という実感を持てる勝ち負けのない関係性を意味する言葉(p. 8)」と述べている。単に一個人のコミュニケーションスキルではなく、それを1つの道具として「他者と対等な関係を構築するための理論と実践」と筆者自身は位置づけているため、「アサーティブネス」という語がより適切であると考えている。ただし、現在行われているATにも、個人のスキル向上を主たる目的とする場合もあり、その比重の掛け方は実践者によって異なる。
- 2 本稿での報告はその調査研究の一部であり、実施した調査には「対等な扱い」についての体験など、他の質問項目も含まれていた。
- 3 筆者は、近畿大学文芸学部文化学科のカリキュラム内において4年間ATを実施してきた。その実践報告については堀田(印刷中)を参照されたい。他大学でも、東京大学、首都大学、立教大学、國學院大學、専修大学などでは学生相談室の主催、法政大学では「学生支援GP」内で、ATが実施されている。

参考文献

Alberti, E. & Emmons, M. L. (1970/2008). *Your Perfect Right : Assertiveness and Equality In Your Life and Relationships (9th ed.)* Impact Publishers: CA.

福野光輝(2009). 公正・公平 遠藤由美(編) 社会心理学 ミネルヴァ書房 pp. 226-243.

原田耕太郎(2006). 報酬分配場面における公正認知に関する研究 大学教育出版

平石賢二(2007). 青年期の親子間コミュニケーション ナカニシヤ出版

堀田美保(印刷中). 大学教育におけるアサーティブネス・トレーニングの実践 教育論叢

- Hotta, M.(1992a). Fairness of adjudicated allocations. Dissertation, Carleton University.
- Hotta, M.(1992b). Fairness of adjudicated allocations: Adjudicator-observer differences. Annual Congress of Canadian Psychological Association, Quebec. Canada.
- 池田幸恭(2006). 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 教育心理学研究, 54, 487-497.
- 小高 恵(1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
- Leventhal, G. S.(1980). What should be done with equity theory? New approaches to the study of fairness in social relationships. In K. J. Gergen, M. S. Greenberg, & R. H. Willis (Eds.), *Social Exchange: Advances in Theory and Research*. NY: Plenum. pp. 27-55.
- Lind, E. A. & Tyler, T. R.(1988). *The Social Psychology of Procedural Justice*. NY: Plenum.
- 庭野晃子(2005). 共働き夫婦の「対等」の意味づけ——家事育児分担する夫婦へのインタビューから Sociology today, 15, 26~40 お茶の水社会学研究会.
- 太田伸幸(2007). ライバル関係の心理学 ナカニシヤ出版
- 沢崎達夫・平木典子(2005). アサーション・トレーニングの考え方と歴史 平木典子(編)アサーション・トレーニング：その現代的意味 現代のエスプリ vol. 450 至文堂 pp. 30-36.
- 嶋 信宏(2000). 大学生の就職活動期のストレスに対するアサーショントレーニングの意義. 教育心理学会発表論文集, 42, 568.
- 清水隆司・山田達治・田原裕之・永渕啓子・久保田進也・三島徳雄・永田頌史(2005). バーンアウトと自尊心、アサーティブ(アサーション)・トレーニングの関係 産業衛生学雑誌, 47, 628.
- 菅沼憲治(2002). セルフアサーショントレーニング：疲れない人生を送るために 東

京図書

- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1986). The Social Identity Theory of Intergroup Behavior. In Worchel, S. & Austin, W. G. (eds.) *Psychology of Intergroup Relations (2nd ed.)*. Chicago: Nelson-Hall. pp.7-24.
- 田中堅一郎(1996). 報酬分配における公正さ—社会心理学的考察 風間書房
- 寺崎賢一(1991). 教師と生徒の対等・平等を正しいとすることに問題あり(特集「授業崩壊」の真実を検証する)——(教師として「授業崩壊」の雑誌・新聞・テレビ報道をどう思うか) 現代教育科学, 42, 32-34.
- Thibaut, J. & Walker, L. (1975). *Procedural Justice*. NJ: Erlbaum.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the Social Group: A Self-Categorization Theory*. Oxford: Blackwell. (蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美(訳)
(1995) 社会集団の再発見：自己カテゴリー化理論 誠信書房)
- Tyler, T. T., Rasinski, K., & Spodick, N. (1985). The influence of voice on satisfaction with leaders. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 72-81.
- Wolpe, J. (1969/1992). *The Practice of Behavior Therapy (4th ed.)*. NY: Allen & Bacon.